

# 名古屋市教育委員会臨時会

平成27年11月10日

午後2時05分

教育委員会室

## 議 事

日程1 市内中学校男子生徒の自死について

日程2 第26号議案 名古屋市いじめ対策検討会議委員の委嘱について

### 出席者

梶 田 知 委員長

福 谷 朋 子 委員

小 栗 成 男 委員

野 田 敦 敬 委員

船 津 静 代 委員

下 田 一 幸 教育長

教育次長始め、事務局職員13名 ※傍聴者1名

(梶田委員長)

それでは、ただ今から教育委員会臨時会を開催いたします。

初めにお諮りいたします。本日の議事につきまして、当初の現場視察から急きょ予定を変更し、日程第1として「市立中学校男子生徒の自死について」を行い、また、日程第2として「第26号議案 名古屋市いじめ対策検討会議委員の委嘱について」を追加したいと思います。よろしいでしょうか。

(各委員)

異議なし。

(梶田委員長)

それではさよう取り扱させていただきます。

続いて議事運営についてお諮りいたします。日程第2につきましては、非公開として審議したいと思いますがいかがでしょうか。

(各委員)

異議なし。

(梶田委員長)

ご異議なしと認め、そのように取り扱させていただきます。

それでは、日程第1「市立中学校男子生徒の自死について」を議題といたします。本日は、ナゴヤ子ども応援会議への出席にあたり、事務局から説明を聴取したいと思います。

それでは事務局の説明をお願いします。

(三浦指導室長)

今回の市立中学校男子生徒の自死についてご説明申し上げます。

資料1をご覧ください。「1 当該生徒」から「3 状況」までにつきましては、前回の教育委員会でお話をさせていただいておりますので割愛させていただきます。

「4 当該生徒の普段の様子」からお願いいたします。

中学校に入学後、欠席もなく登校していました。また卓球部に所属、部活動には真面目に参加しており、欠席するときにはきちんと連絡がありました。事案前日の10月31日土曜日に確認されていることとして、朝8時5分に部活に出てきましたが、この日は練習試合の日で、当該生徒は参加予定ではなかったため、気づいた顧問が確認したところ「忘れていました」と言って帰宅をしています。

体型はぼっちゃり型で、運動、勉強も苦手でありました。とても優しい子でしたが、精神的に決して強い子ではありませんでした。

事案前の教育相談や学校独自のアンケート調査、これは2か月に1回ほど実施されておりましたが、これらの中では、当該生徒がいじめられているという事実は確認されておりません。最終の9月のアンケート調査では学校生活の満足度を4段階で記入するようになっておりますが、上から2番目の「3」に丸が付けられており、その理由として、部活動や友人のことが挙げられていました。この他にも学校は、各種の調査によ

り当該生徒を把握、理解しておりますが、その調査の方法や実際の対応も含めまして、後ほど資料3で説明させていただきます。

「5 学校の様子」ですが、当該生徒以外の生徒に対するいじめについて認知しているものはありましたが、その中に重大事態として捉えているものはありませんでした。

卓球部では9月に、生徒間でアドバイスを交わす際に言い方がきつかったために言い争いになったというトラブルがあり、顧問が指導したことがございました。なお、この時のトラブルに当該生徒は関わっておりません。

「6 事案後の対応状況」ですが、まず、学校の教職員に対して、11月1日当日、日曜日から4日水曜日までに、教育委員会指導主事となごや子ども応援委員会スクールカウンセラーの複数体制を中心として、ひととおりの聞き取りを終えました。この中で、当該生徒へのいじめに関する内容は確認できませんでしたが、部活動の中で2年生が1年生に対して強い言葉で指導したのを見た教員が「そういう言い方はしないように」と指導したことがあると証言しました。この1年生の中に当該生徒がいたかどうかは分かっておりません。

2日月曜日には、関係の深かった一部生徒、同学年の卓球部の生徒9名について、教務主任と子ども応援委員会スクールカウンセラーで聞き取りを実施しました。この中で、当該生徒へのいじめに関する内容は確認できませんでしたが、うち1人は亡くなった生徒から10月中旬に「もうだめかもしれない」と聞いたことがあると証言しました。この生徒は、その内容を「部活動のことではなく、人生のことや家のことなどいろいろ」と受け止めていたようです。

3日火曜日には、教育委員会11月臨時会を開催し、それまでに分かった事実関係及び今後の対応について確認するとともに、引き続き調査と対応を指示しました。

4日水曜日には、全校生徒に対する緊急アンケート調査を実施しました。結果については資料2にあるとおりでございます。

5日木曜日には、緊急アンケート調査の結果を遺族に、また記者会見及び11月定例会で報告をしました。教育委員会11月定例会では「名古屋市いじめ対策検討会議」に事実関係の調査等の諮問を決定しました。さらに、当該生徒が通っていた小学校の教職員5名に対する聞き取りを、教育委員会指導主事が実施しましたが、当該生徒へのいじめに関する内容は確認ができませんでした。

6日金曜日からは、緊急アンケート調査の結果を踏まえて、順次、教育委員会指導主事と子ども応援委員会スクールカウンセラーの複数体制で、関係生徒への詳細な聞き

取りを行っております。聞き取りの対象は、当該生徒と同じクラスの生徒28人、卓球部員67人の予定です。聞き取りの中で具体的な事案等が出てきた場合には、聞き取りの対象を拡大する可能性もございます。聞き取りは現在継続中でございますが、18日水曜日の名古屋市いじめ対策検討会議までには、一通りの聞き取りを終えたいと考えております。

今後でございますが、先ほど言いましたが、外部有識者による名古屋市いじめ対策検討会議を18日に開催し、調査を開始していただきます。平成25年7月に発生した名古屋市立中学校生徒の転落死に係る検証委員会で委員を委嘱した有識者にも参画いただく予定でございます。

また、当該校の子どもたちへの対処といたしまして、なごや子ども応援委員会、教育委員会指導主事の常駐及びスクールカウンセラーを手厚く配置し、生徒の不安解消や心のケアを実施してまいります。さらに、なごや子ども応援委員会のスクールポリスやスクールガードリーダーによる巡回を強化して、登下校時の子どもたちの安全を確保するとともに、ネット上の誹謗中傷などの書き込みに対応するため、ネットパトロールを強化してまいります。

続いて資料2でございますが、前回の教育委員会でお諮りさせていただいておりますので、割愛させていただきます。

次に、資料3「当該中学校で実施していた各種調査について」をご覧ください

当該生徒について、学校がどのように把握してきたのか、また、どのように対応してきたかについてご説明いたします。

なお、資料につきましても、当該生徒の個票、あるいは当該生徒本人が書き記したのもございますが、個人情報を含む内容であり、そのものを提示することは差し控えていただきたいというご遺族の希望もございますので、サンプルを用いてのご説明とさせていただきます。

担任は、4月当初より、当該生徒について、心も身体も強い子ではなく、どちらかといえばいじめられやすい方だという印象を持っていたそうです。また、学習面でやや理解に時間がかかると感じていたそうです。

まず、いじめに関わる調査等について説明をいたします。

別紙2をご覧ください。これは5月15日金曜日に生徒が記載した教育相談アンケートの様式ですが、当該生徒のものには、いじめに関わる内容はございませんでした。またそのアンケートの実施後、5月20日水曜日に行われた当該生徒と担任による教育相談

でも、いじめられているとの相談はありませんでした。

別紙4、5は、6月29日月曜日と9月25日金曜日に行った学校による独自のアンケート調査です。いずれも、当該生徒の用紙には、いじめに関する記述はございませんでした。

次に、この生徒自身についての調査等について説明いたします。

別紙1をご覧ください。これは、4月8日水曜日、入学当初に行いました「教研式サポート 学習スタイル診断」のサンプルです。これによると、当該生徒の結果は、学習のペースが遅く、指導のポイントとして、小さな学習ステップを用意し、個別指導することが効果的であるなどの内容が記されていました。

別紙3をご覧ください。6月15日月曜日に実施した、学校生活における生徒の意欲や満足感を測定するハイパーQ Uのサンプルです。当該生徒のハイパーQ Uの結果は、学校生活には満足ができていないという結果が出ておりました。そのため、担任は、当該生徒をよく観察し、声かけや関わりを多く持とうとしていたそうです。また、このハイパーQ Uでは、教師との心理的な距離があまり近くないとの結果が出ていたため、その後行われた保護者、当該生徒、担任による三者懇談において、担任が保護者にこの子にどう接すればよいかと相談しておりました。

また、当該中学校では、このハイパーQ Uを年間2回行っており、10月9日金曜日に行った2回目の調査では、当該生徒は、支援を必要とするグループに属しておりましたが、その結果が10月28日水曜日に学校に届けられたこともあり、その後、情報を学校、学年で共有し、対応を検討していくところでした。

以上で説明を終わります。

(梶田委員長)

説明が終わりましたので、何かご質問、ご意見等はございますでしょうか。

ただし、公開の場でございますので、個人情報等について、ご注意いただきたいと思います。よろしくお願ひします。

(野田委員)

学校としてはかなりいろいろな調査をされて、そこから出てきた情報で、学年間、あるいは担任の先生が、当該のお子さんに対してかなり気を付けて見られていたということも伺いました。ハイパーQ Uの方も、市としては1回しか予算化できていないところを2回や

られて、対応を速やかにやられたというふうにお聞きしましたが、当該生徒のクラス、学級の雰囲気はどんなものだったのでしょうか。

(三浦指導室長)

子どもたちから聞いたところによれば、非常に明るく楽しいクラスであったというふうに言っている子どもが多くおります。

(野田委員)

各種調査しているんですけども、1年生なのでそういうことはないと思いますが、小学校時代もやっているとしたら、こういういじめ関連の調査が少し形骸化している、慣れてしまっているという部分はどうなのでしょう。小学校の先生にも聞き取りされたようですので、慣れてしまっていて、あまり正直に答えないとか、その辺りはどうでしょうか。

(三浦指導室長)

このハイパーQ Uに関して言うと、標準化された調査となっております、そういうことが分かるようになっているというふうに考えて、私どもも採用している調査ではございます。

(野田委員)

そのハイパーQ Uについて、2回目は10月28日に届いて、これからという時に残念なことになったわけですけども、1回目が学校に届いて、ハイパーQ Uの結果をどう活かしていくかというのは、職員間でどんな共通理解というか方策がとられていたのでしょうか。たぶん2回目も同様のことをされる予定だったと思うんですが。

(三浦指導室長)

当該の学校は、このハイパーQ Uを2度実施していることから分かるように、かなり児童理解というかそういうものにこの調査を活用しております。1回目の調査が6月15日に実施をされたと先ほど言いましたが、6月の下旬にはアンケートが届きます。7月の中旬の学年会で情報の共有、今出てきた支援を必要とする子どもであるとか、あるいは先ほど言った学校生活に満足していない等の洗い出し等を行って、今後の対応等を情報共有して、対応を検討しているというようなことをしております。7月6日からこの学校は三者懇談を、

先ほどもあったんですけれども、その三者懇談のところでこのアンケート結果を基にして面談をし、子どもに渡す個人票を渡していると聞いております。10月の方は、11月5日に学年会が行われる予定で、実際行われておりまして、共通理解をしているところでございます。

(野田委員)

そうすると、かなり計画的にハイパーQ Uの1回目をやって、届いた直後に学年会を開き、さらに三者懇談でその資料を基にして、保護者の方も含めて情報を共有していくというシステムはできていたということですね。よろしいでしょうか。

(三浦指導室長)

そのように捉えております。

(野田委員)

それで、学年間で捉えるときに、学年間で情報共有するときに、このお子さんは不満足群、言い方は悪いかもしれませんが、満足していないグループに属していましたので、学年の先生方にもその情報は共有して、そこから数か月間そういう形で、担任の先生だけではなくて、学年でもマークすると言いますか、注意して見るという共通理解ができていたということですね。

(三浦指導室長)

同学年、あるいは教科担当しているところも同学年で多いと思われまして。その同学年の中で学年全体に情報を共有して対応をするようにしていたというふうに把握しております。

(野田委員)

なのに、そのサインが受け取れなかったということですね。

(三浦指導室長)

はい。

(梶田委員長)

関連で、6月にも実施しているわけですが、11月5日の分はこの生徒はもう亡くなっておりますので、6月の時にこの生徒のことにに関して、このハイパーQ Uを使って結果を学年で共有してどんな対応してきたか、事例だとか。差し支えのない範囲内で、お話しできますでしょうか。

(三浦指導室長)

この学校のハイパーQ Uの結果の取り組みで、この生徒の情報をまず共有したところで、活躍できる場面や認められる機会を授業や学級活動、学校生活に取り入れていこうとすることが、まず学年間で共通理解が図られています。それから、学校全体のところで言いますと、子どもに「あなたはとても良いところがあるんだから、先生は好きだよ。でも何かあったら、心配だから、先生と一緒に解決していこうね。」みたいな、これは例ですけれども、そういった投げかけをするようにといったような、これは学校全体ですけれども、そういう共通理解がされていたというふうに把握しております。

(野田委員)

そうやって学年間で情報を共有しながら対処していったんでしょうけれども、その間にスクールカウンセラーさんとのやり取りはどの程度あったんでしょうか。

(三浦指導室長)

スクールカウンセラーとは、Q Uの方は情報共有するように、事務局の方から話をしておりまして、状況に応じて、スクールカウンセラーに要請して解決にあたるということは、この学校でもやられております。

(野田委員)

やられているんですか。この子に対してですか。

(三浦指導室長)

この子に関しては、特に相談するようなことはございませんでした。

(野田委員)

全体的にはやられているけれども、この子に関してはスクールカウンセラーさんとやり

取りしたことはなかったということですね。

(三浦指導室長)

はい、ございません。

(福谷委員)

別紙3のハイパーQUの1のところに「学級満足度尺度」というのがありまして、「非承認群」とかあるんですけど、予算を付けるときに私もこれを作られた先生の講義を受けたんですけど、先ほどおっしゃった「不満足群」とか「要支援群」というのは、左下のところというふうに理解してよろしいですか。

(三浦指導室長)

左下の部分になります。

(福谷委員)

差し支えなければ結構ですが、当該学年でこちらの左下に位置する生徒が何人いたか、個人情報等で差し支えあればいいですが、何人くらいいらっしゃったか教えてください。

(梶田委員長)

当該学年ですか。学級ですか。

(福谷委員)

クラスです。当該学級でまずどうでしょうか。

(三浦指導室長)

学級は7名でございます。6月の結果です。

(梶田委員長)

学年ではどうですか。

(三浦指導室長)

今回、この学級のものを取り寄せておりますので、学年ということは分かっておりません。

(梶田委員長)

しかし、学年会と言いますか、先生は学年で対応をするという話でしたので。それと、学年の人数も。

(三浦指導室長)

学年は、5月1日現在で176名でございます。そのうち45名でございます。

(福谷委員)

当該学年のクラス数を教えてください。

(三浦指導室長)

6学級でございます。

(福谷委員)

左下の「不満足群」というか「要支援群」の生徒に対して、学年で情報を共有することですけれど、認めてあげるとか困ってることがあったら話してねという声かけをするという一般的なこと以外に、それぞれの生徒の情報等についても全体で共有されていたかどうかについてはどうですか。

(三浦指導室長)

特に支援を要する生徒につきましては、現状の分析、それから教育相談に向けてどういうことを話をするか、そしてその相談後の対応等についても対応しているということ聞いております。

(福谷委員)

そうしますと、6月のアンケートの時点では、当該生徒は支援を要する生徒という方には入っていなかったということよろしいですか。

(三浦指導室長)

その通りでございます。

(福谷委員)

満足はしていないという、次の区分ということですね。次のというか。

(三浦指導室長)

左下にはいるんですけれども、分類でいえば支援を要するところには入っていなかったということです。

(梶田委員長)

先ほど45名とおっしゃられたのは、支援の必要なグループではないですね。

(三浦指導室長)

「不満足群」ということではなくて、学校が心配をしているというところで、右下の一部を含めての数でございます。

(梶田委員長)

それを学年で共有しているということですか。

(三浦指導室長)

そういうことです。

(福谷委員)

こちらもし差し支えがなかったらなんですけれども、当該生徒、6月は支援を要する生徒には入ってなくて、10月の時点のものは、結果的に後でふたを開けてみれば入っていたということですが、「要支援群」の学年の人数と当該クラスの生徒さんの人数がもし明らかにできれば教えてください。

(三浦指導室長)

6月は学年で8名、クラスは2名です。

(下田教育長)

その8名のところで、6月から9月に改善された例はありますか。

(三浦指導室長)

ぱっと数が出てきませんが、こちらの群から上の方に行く例もございます。

数は、クラスでいうと2名、1名は「不満足群」に変わっております。

(梶田委員長)

もう1名はそのままということですか。

(三浦指導室長)

そのままでございます。

(福谷委員)

確認しますと、6月の段階で2名いて、2回目のときも2名で、要支援の子が「不満足群」に変わった子もいるので、人が入れ替わって人数は変わっていないという理解でよろしいでしょうか。

(三浦指導室長)

申し訳ありません。支援を要するで言いますと、2名いたものは10月の段階ではそこには入っておりません。ですので、新たに入ってきた生徒ということになります。

(野田委員)

6月の方の対処が生きていたということですね。その2名については。

(福谷委員)

ここについてももう少し。6月の時点で要支援だった生徒2名については、2回目の時には要支援の生徒さんではなくなったということですね。

(三浦指導室長)

そういうことで結構でございます。

(福谷委員)

ちょっと当該生徒ではないところで、プライバシーに関わるかもしれないんですけども、「不満足群」には入っているのか、そうではなくて改善したのか。具体的に何が言いたいのかというと、情報共有することにより改善ができていくかどうかということを確認したいんですけども。

(三浦指導室長)

1人は不満足になり、1人は抜けたということになります。

(梶田委員長)

この生徒の他に、要支援になってしまったという生徒は何名かみえるんですか。

(三浦指導室長)

1名おります。

(梶田委員長)

他1名ですね。

(船津委員)

別紙2の教育相談アンケートなんですけれども、それと別紙4、5とか、学校として、ものすごく生徒さんの様子を知ろうとして、細やかにアンケートを取られている様子が分かるんですが、具体的にこの教育相談アンケートを、どのような場所で、どのくらい生徒たちは時間をかけて書かれるものなのかというのを教えてください。

(三浦指導室長)

通常ですと、ホームルーム等の時間を利用して学校でやられるものだと思います。時間的には10分から15分程度で書くと思われれます。

(船津委員)

そうすると、勉強に時間がかかるお子さんだったりすると、全部を答えるのに少し時間が足りないということもあるのかなと思うのが1点で、もう1つお聞きしたいのは、せっかく取られたものからたぶん要支援が分かって、ここから実際の取り組みにつながっているものもちゃんとある中で、彼の声が聞けなかったということが知りたいんですね。つまり、書かなかったのか書けなかったのか、その時なかったのか、それについて分からないんですけれども、実際こういうアンケートとか、生活のアンケートを取られることで、救われていっているお子さんがいらっしゃるという事実が知りたいんですが。

(三浦指導室長)

先ほどもちょっとお話がありましたハイパーQUについては基本的に選択式ですが、こちらは記述式でございますけれども、これで自分がいじめられているということを言ったことで解消した例も、この学校にあったと聞いております。

(小栗委員)

質問というより要望も含めてなんですけれども、大変不幸なことが起きて、まずもってすごく今危機感を持っています。同じようなことが起こらないように、急がないといけないという視点で要望があるんですけれども、まず1点目は、10月28日にハイパーQUの2回目が届いていた。実際それは、先ほどの話でいくと、検討が11月5日。ということは、1週間ある。1回目が6月に実施をして、その時に不満足であるということと、1クラス約30名弱とすると、1回目の結果を見て、ある程度この辺は注意をしていかなければならない子が数名いたということが頭にはあったと思うんですね、先生の。そうすると、申し上げたいことは、28日にハイパーQUの結果が届いたということであれば、いろいろ教員によって多忙感とか仕事の量とか違うかもしれませんが、最優先でそれを見るべきではないのかなと。今後同じことが起こらないようにする、いくつかのうちの1つは、とにかく届いたら、すぐにまず確認をすべきであるというようなことを指導していただけるとありがたい。特に30名弱であればどのくらいの時間がかかるかは別としまして、もし同じ担任の方であれば、ある程度前回のことが頭に残っているでしょうし、今の福谷委員とのやり取りで、結果が変わる人たちもいるかもしれませんが、やはりその頭に残っている、気にかかっている生徒については、着いた時点で真っ先に封を開けて見るといった行動が必要になってくるのかなと。事実、10月の2回目の結果については、悪化をしていたということがありましたので、今後指導をされるときに、いろいろアンケートなんかもされてますが、

また聞き取りもされてますけれども、そこで拾えなかった情報が、唯一ハイパーQUの2回目から拾えたということであるならば、今後の指導の中で、最優先で、いろいろ多忙感がある中で、それが届いた時点でチェックをしていくべきだという指導をしていただけるとありがたいなというふうに思います。

(西淵教育次長)

誤解が少しあるんですけども、10月28日にこれは届いたんですけども、翌日に担任が目にするというふうな形で、それが木曜日です。それで、この方が亡くなったのは日曜日、30日が金曜日で、担任はこの段階で開けていたかどうかというのは分からないです。見ていたかどうか。11月5日というのは、学年会を開いて、学年でその情報を共有しようという会をもつというのが5日になります。

(小栗委員)

それでお願いしたいのは、届いているのであれば、即、やっぱり封を開けるべきであるなど。

(西淵教育次長)

それは確認されていないので、いつ封を開けたかということは。

(小栗委員)

そういうことなんですよね。それが今回の、今まで我々が持っている情報でいくと、ハイパーQUのみから、今の彼の精神的な部分が読み取れるということであるならば、今後は最優先でその届く日を確認し、まずは何よりも最優先で確認をしていただきたいということはいかがでしょうか。

(金田学校教育部長)

今、小栗委員がおっしゃられたことは本当によく分かります。それで、もちろん気がかりにしている子、つまり、1回目で気がかりにしている子の変化の様子を知ることも、もちろん大事です。一方で、1回目は何事もなく割と満足していた子が、急に不満足の領域に入ってくる場合もあるものですから、やっぱり全体の子どもたちに対して、このデータというのは貴重だと思っております。そういう意味でも、できるだけ早く子どもたちの様

子の変化を見るということは大事だと思いますし、そういう学校への指導は今後してまいりたいと思います。

(小栗委員)

そうすると、仮に今30名弱として、1枚見るのにどれくらいかかるか分かりませんが、かける30をする。1枚あたり例えば10分であれば300分、5時間くらいなのかなと。そのうちの、今の話で、悪化している子もあれば良くなっている子もある。ただ、30人見るのはとても大切なので、やはりある程度何分かかかるかということ一度確認をしながら、30人弱を見るのにどれくらいかかって、やはり優先的にということをしていただきたい。

(野田委員)

10月28日に届くというのは学校としては分かっていなかったんですか。正確には分かっておらず、だいたい下旬ということしか分かっていないということですか。

(三浦指導室長)

これは、だいたい2週間くらいで届くというふうになっておりまして、何日に届くというふうに来てるわけではないということです。

(小栗委員)

それは当然学校によって差があるということですね、届く日にちは。

(三浦指導室長)

基本的にこの調査自体が、調査をして、出して分析をして帰ってくるものですから、外部に分析を依頼する、その日にちが2週間程度かかるというふうに聞いております。どの学校も2週間程度ですけれども、かかるということになります。

(小栗委員)

その程度というのは、生徒数によって変わるということでしょうか。多い少ないで。何を申し上げたいかという、とても大切なことだと思うんです。この結果というのはとても大切なことだと思いますので、程度で今後進めていくと、その程度が例えば少人数と生徒の多い学校とで違うのであれば、あらかじめ誤差1日とか2日くらいとかいうふうにした

方が良いのかなとか、今申し上げたようにとても大切な資料であったわけなので、今後は大切な資料を、程度ということよりも、少なくとも、申し上げたように少人数、大人数で届く日にちが変わるのであれば、そのところはもう少し業者さんと詰めて、具体的に誤差が極力少なくなるようにとか、それからもし休みの前に届くのであれば、あらかじめそこで、例えば2日間とか空いてしまって子どもと接しられないという状況であれば、日にちをもう少し前倒しにしてもらおうとか、何かそういったことも、大変数多くて一つ一つというのは大変な作業になると思いますけれども、それを意識的にやっていくことだけでもひよっとすると改善につながるのかなというような気がしました。

(梶田委員長)

私からまず言いたいんですが、1点は、このハイパーQUの結果が、学年でという話はありませんが、部活の顧問、この卓球部に限らず、部活の顧問には共有されているんでしょうか。

(三浦指導室長)

それについては調査しておりません。

(梶田委員長)

それともう1点、担任の先生は4月の段階でこの生徒がいじめにあいやすいという感じを持ったというお話がありました。そういった担任の先生方が、この生徒に限らず、そういういじめにあいやすい生徒なんだということは、やっぱり学年会で共有をされて、このハイパーQUで出てきた生徒と同じような対策というのは講じられているんでしょうか。

(三浦指導室長)

6月の段階でということですか。

(梶田委員長)

年間を通してですね。

(三浦指導室長)

そのところはよく分かりませんが、客観的な結果でこのハイパーQUで出てく

るものですから、それを共有するという事はございますが、その子についてどうだったかということについては、申し訳ありません。

(金田学校教育部長)

この学校がどうかということは正確に確認しておりませんが、一般的に、4月に学年、年度が替わりますと、新しいクラスの子どもたちを担当が掌握します。その際に、前の学校から、あるいは前の学年からそれなりの情報を得て、その情報を踏まえた上で、子どもの様子を見て、必要ならば、配慮が必要な生徒として職員全員で共有できるような、そういう手続きはどの学校も大抵しております。つまり、気がかりな子どもについては、ハイパーQ Uに限らず、年度当初から職員間で共有できるような、そういう場は持っているということでございます。

(梶田委員長)

どこの学校でもやられているという話は、今、部長から聞いたんですが、ここの学校では、この生徒については、どうだったんですか。

(金田学校教育部長)

私どもが今のところ聞き取った範囲では、ここの学校において、この生徒について、4月当初に配慮を要する生徒として共有していたということはなさそうです。

(梶田委員長)

でも、他の生徒は、そういう対象者については共有されて、対応が共有されておったと解釈していいですか。

(金田学校教育部長)

はい。

(野田委員)

今、割とQ Uで、学級のことが話題になっておりますけれども、部活の方も人も多いことが1つにはあるので、その件で、この間定例会でお聞きしたときには、70名近い部員がいたと。前顧問が熱心な方で、その顧問が抜けちゃってという話ですけれども、私の経験

で言うと、教科指導だとか生徒指導については、研修があったり先輩から教えられたりして、ある程度その知識が増していくんですけども、部活についてはさほどそういうことはなくて、かなり自分の経験によるところが多くなるんですけども、今担当してみえるお2人も、教諭といますか、これもプライベートに関わりますので、ベテランなのか中堅なのか、あるいは、まだまだ就いて間もない方なのかということをお教えください。

(三浦指導室長)

2人とも若手の教員ということでございます。

(野田委員)

そうしますと、まだこれから部活動の指導なんかについては、手探りで経験を積み重ねながらやっていく段階だったんじゃないかなと。そうしますと、もちろん部活だけやってみえるわけではなくて、教科指導もやり自分の担任の学級もやりという形で、部活は課外ですので、それをお2人で70人近い部員を抱えて、アンテナ高くしながら細部まで見ていくというのは、私としては非常に厳しかったのではないかなというふうに思います。先ほどの小栗委員から言われたように、もっと早くQUを見るに越したことはありませんけれども、例えば、4時まではいっぱいいっぱい教科指導等をして、その後部活動へ行かなければならない。その後QUを見るとすると、例えば先ほど1人10分と言われましたけれど、だとすると、その日にはたぶん見れません。見ようと思えば、かなり勤務時間をオーバーしてしまう状態になります。また、果たして若いお2人が70人前後の部員をまとめることが可能であったのか、そういう学校としての取り組み、あるいは教育委員会としての取り組みが十分だったのかなと、ちょっとその辺は残念だな、申し訳なかったなというふうに感じております。

(三浦指導室長)

確かに、今おっしゃったとおり、ずっと、終わってから子どもたちを見続けるのは難しかったこともあるだろうと思います。だから、ある程度のところで見に行っていたのではないかなと、これは推測でしかございませんけれども、ずっと見ていたかということ、なかなかそれは難しいと言わざるを得ないところです。

(野田委員)

ただ、この場合は見てみえたんじゃないかと思うのは、31日、前日ですね、練習試合の日に彼が来ましたと書いてある。そうしたら、〇〇くん、今日は来る予定じゃなかったんじゃないのということを、声をかけれたというのは、彼の状況を、若い先生はある程度把握してみえたと思うんですね。それだけ部員がいるのに、この子は今日来る子ではなかったと先生が把握してみえると思うんです。その努力は素直に認めたいなと思います。ただ、システム的に、これはよくあると思うんですけれど、1軍とか2軍とか3軍とか、1年生も何人かに分けられている中の一番下だったというふうに、この間もありましたけれども、そういうスタイル、どこを見回しても運動部にはあるのかもしれないですけれども、やっぱりレギュラー中心に目が行ってしまって、どうしても1年生の、しかもそこになかなか遠いところには、なかなか満足がいくような、でも彼は楽しいと言っているんですけれども、指導ができなかったんじゃないかなと。しかも、一番下の部類になりますと、やっぱり上からのプレッシャーというのはどうしても運動部だと少なからずあってですね、遺書にあるように耐えられない状況になったんじゃないかなと思うんですけれども、その辺の部活のシステムとかやり方とかは、かなり個人に任されているんですけれども、そういう研修はあまりないですよ。技能的な研修はあっても、そういった部活の運営についての研修というのはあるんでしょうか。

(野嶋スポーツ振興課長)

今ご指摘のございました研修については、技術的な指導についてはやらせていただいております。ただそういった形、この学校ではAからHという形でレベルに合わせてグループ分けしてやっていく、そういった形はございますが、そういったことまでの研修はやっておりません。ただ、この学校固有の問題として、AからHに分けていっている理由は、やはり卓球台が少なかった、ある程度全員で一気にやるほどの台数がなかったということで、グループ分けして順番にやるために、グループ分けしていたということと、さらに、同じレベルの子どもどうしの方がラリーを続けやすい。また指導する側も、同じレベルであれば同じアドバイスできますので指導しやすかったということで、その学校の部活の中で、長い間の歴史の中で培った練習方法だというふうに伺っております。

(下田教育長)

部活が楽しいというこの子のアンケートの状況と、最後のノートが、耐えられないという、ここの差を埋めれるような調査というのはできそうですか。

(三浦指導室長)

今、聞き取り等も行っている最中でございますので、その辺が出るのかなというふうには思っております。

(梶田委員長)

意見になってしまうかも知れませんが、ハイパーQUの客観的な結果で、学年で共有し対策を取る。そしてそれが特に要支援の子に対しては、一定の成果を収めて、改善の方向にできたという、ハイパーQUの結果だけがすごく重きを置かれているような気がするのです。4月の段階で、この子はいじめにあいやすいという認識であれば、経緯は分かりませんが、それでも今そういうふうに思うのであれば、どうして学年でちゃんと共有して、この子に対してどうケアをしていくかという対策が立てられなかったのかなと。特に6月にも不満足群にも属しておったのに、そういう対策が打てなかったのかなということが、私は残念でならないと思うんですね。もしかしたら、その4月の時にそういう対策を、学年をあげて対策が必要だという取り組みをしておれば、もしかしたらこういうことにはならなかったのかもしれない。辛らつな言い方をしますが、危機感が薄かったんだろうなというふうに思えてならない。それともう1つ私からの疑問ですが、今日の説明では、11月3日に教育委員会臨時会で事実の確認をしたと言っておりますが、今日の提供いただいた説明資料と3日の段階で把握しておった、時系列で書いていただいておりますが、その情報量の違い、その時の報告では、いじめと確認されるようなことはないというふうに言っておりましたし、おそらく新聞にもそのように報道されていた。しかし、それは今日の説明からすると、確かに言葉尻だけ取ればいじめという言葉は出てこなかったかもしれないけれど、そこが私はギャップだと思うんですよ。いじめる側といじめられる側、いじている側は本当にいじているだけ、じゃれあっているだけという認識しか持ってない。それからいじめられている側は、そのじゃれているということが心の痛みになっていじめと感じている。このギャップなんですよ。だから当初に、いじめですか、いじめは認識してましたかという問いに対して、認識されていないと。それだけを取り出して、我々に報告をしましたと。そこに私は皆さんのいじめに対する認識の甘さというのがあったんじゃないかなと。いじめというものを、もっといじめられる側といじめる側の認識の違いというものをもっと真剣に考え、皆さんも先生方も真剣に考えないと、このギャップがどんどん広がっているような気がするんですね。ですから、教育現場が今の感覚でいじめを見つけよ

う、捉えようとする、おそらくそのギャップというものを本当に意識しないと、埋まっていかなさうなと。またこんな事故が起こるかもしれない、というふうに私は思えて、今回、その点が甘さだなというのが意見です。

(野田委員)

委員長が言われることはもっともだと思いますけれども、今、かなり部活のこと、学校のことが焦点になっているんですけれども、例えば、学級29人、1人の担任で見ている。部活67人、2人の顧問で見えています。それは、仕事と言われればそれまでですけれども、やはり、なかなか目が届かないことは事実であるし、今すごく意気消沈してみえるご家族に申し訳ないんですけれども、家ではほぼ1対1で様子が分かるわけです。学校だけでなく、そここのところも注意してくださいということも言っていないと、家ではほぼ1対1で見られるのにあまり気付いて見えなかった。当日、おばあちゃんですか、様子がおかしいということでありましたけれども、学校だけでなく、いかに家庭、地域で連携していくかということは非常に大事なことで、そこが、ぜひ今後、学校、家庭、地域の環というのは求められているので、学校、地域でもそういうことを見つけて、見ていただけるような体制がこれから作っていかなくてはならないなと感じております。

(小栗委員)

また少し視点が違うかもしれません。どうすれば防げたかなという視点で、2つ目の質問なんですけれども、部活に関しての質問になってきますが、前回ご質問させていただいた時には、非常に出席率も高かったと。ところが10月のいつぞやから欠席になっている。実際、不幸な事件は11月1日であって、その2週間くらいの彼の出席がどうなのかなということです。もし、先ほど野田委員がおっしゃられたように、卓球部の先生も、朝、今日あなたは来るんだったかということで把握しきれていればよかったと思いますが、何日間かもし欠席が続いていたのであれば、そこでどのような指導がされていたのかと、今度は梶田委員長の話とオーバーラップするんですけれども、先ほどお話があったギャップというところで、卓球部の先生と担任の先生と、先ほどのハイパーQUの結果が共有されていたのかと。もし実際に共有をされていたのであれば、また卓球部の先生の見方なり指導の仕方も、ひょっとして変わっていたかもしれません。とすると、話は原点に戻りますけれども、部活と、先ほど学年の共有という話があったんですけれども、部活の先生は学年をまたぎますので、部活の先生とそれぞれ課題のありそうな子たちを事前に共有化すると

いうことも必要になってくるのではないかなというふうに思いますけれども。

(三浦指導室長)

今の、学級、学年でやっていることを卓球部にということだと思っただけですけども、この学校では生徒指導部が集約し、全校職員に対応の仕方というのを回しています。だから、卓球部にということではありませんけれども、対応の仕方については全校で共有するようにしています。学年のことは集まって学年でやりますけれども、この学年にこういう子がいるということは全校の職員には共有されているということです。

(小栗委員)

今回の彼については共有をされていたということですか。

(三浦指導室長)

学年が違う先生にも、ここに載っているということは分かっていたというふうに聞いております。共有されていたものには入っていたというふうには思います。

(小栗委員)

と思うのか、されていたのか。

(三浦指導室長)

されてきました。6月のところでそういう共有はされています。

(小栗委員)

それと、彼の出席状況というのは分かりましたでしょうか。

(三浦指導室長)

10月の19日、21日の2日間は練習を欠席したというふうに聞いており、このときは、塾へ行くために休みますと連絡があったと聞いています。

(小栗委員)

その後はどうなんでしょうか。

(三浦指導室長)

その後は来ているというふうに思っております。

(小栗委員)

思っているのか、来ていたのか。

(三浦指導室長)

その把握ができておらんのですけれども、ただ、休みのときには休むというふうに連絡がある子だと聞いておりましたので。

(小栗委員)

それは調査中ですか。

(三浦指導室長)

調査中です。

(福谷委員)

前回の定例会の時に、声なき声をどう拾うかということを中心に心掛けていただきたいという発言をさせていただきました。この子は自分が学校についてどう満足しているかどうかでは4段階中3がついているわけです。この子自身も、もしかしたら直前までは意識できてなかったのかもしれない、そこが辛いということ。それに、この多感な時期に、いろんな辛いことが学校にも家族にも言えないという方がむしろ通常だと思いますので、そういう声なき声をどう拾えるかということ、ぜひアンテナを張っていただきたいということを前回お願いした次第です。その1つとしてハイパーQ Uというのは有効ではないかということ、今お聞きして改めて確認しました。実際に彼が意識していたのか、して3を付けたのか、していなかったのかはちょっとよく分かりませんが、彼の中では不満を持ったり、そういう状態だったことは結果的に明らかになったわけですね。分析結果に頼りきりというのもまた問題で、やっぱり実際には直接接していらっしゃる先生方が、自分の目を見て、頭で考えて、この子はどうかということ判断していただく必要が当然あると思うんですけれども、さっき野田委員がおっしゃられましたように、たくさん的人数

の子を見なきゃいけないという担任や顧問の先生の立場で、このハイパーQUというのは1つの指針というか、大きな参考になることは間違いないわけですから、小栗委員もおっしゃったように、それに対しての早急な対応もぜひお願いしたいですし、今後教育委員会としてこれをどう活かすかということ、どう見てどう活かすかということの対策をもっと、せっかく予算付けているんですから、徹底してもっと深めていっていただきたいなというふうに思います。ただ、それに過信してはいけないということも付け加えつつにはもちろんなると思うんですけども、研修等も実施するなどして、そこら辺を全教員が活かせるような形、あと、教員が1人で抱え込むことは避けるべきだと思いますので、チームとなって対応できるような体制を整えるということも含めて、研修などで検討していただければというふうに思います。

(梶田委員長)

福谷委員の意見に付け加えさせていただくと、この学校ではハイパーQUは自主的に2回やっている。他の学校では、基本的には今のところ1回。言うと、これが決定的ないじめを見つけるとか、この子の今の状態を示すという調査は、補足的なものでしかないんですね。そうすると、結局学校の先生方の、一人一人の生徒を見る目、この子はいじめられやすいなと思ったらもうそれで十分なので、それを学年、学校で共有をして、ケアしていくということが、非常にハイパーQUだけが今回この席でもクローズアップしてしまいましたが、先生一人一人のことというのを、もっともっと、申し訳ないが、本当に危機感の欠如だと思いますよ。2年前の事件が、私は決して名古屋市では活かされていないというふうに思えてならないですね。

(船津委員)

ハイパーQUのお話の中に、私はアンケートのこともすごく気になりまして、これは本人の言葉だと思うんですね。さっきお話ししたとおり、その時はなかったのか、書けなかったのか、書きたくなかったのかはあるにしても、もう1回このアンケート、せっかく作られたものを拝見していると、例えば、初めのところにフリーのコメントを書くところがあって、ここに文字通りにものをとらえる子は、「いくつでも書いてください」で時間がとられると思うんですよ。そうすると、本当はたぶん知りたいのは後半のことだと思うんですけども、時間切れになっているということはないんだろうかと。ちゃんとここから拾えるということはあったにしてみても、書けない子どももいるんじゃないかなと思う

ところで、せっかく確認になるんだったら、それなら少しでも子どもたちの声を、声なき声がちゃんと挙がるとは限らなくても、少しでも拾えるような形にもう1回検討されるのか、ホームルームの15分ではなくて、教育相談の前に例えば30分前に早めに呼んで、じっくり1人で書くとか、やっぱり安心して書ける場というのが本音を引き出すのではないかなと思うのと、それから、学校生活のアンケートもせっかくお取りになるのであれば、緊急アンケートでは20人がいじめを目撃しているというのに、嫌なことのところには名前が出てこなかった。それは大人からしたら当然かもしれませんが、子どもたちがそこに書けるように、クラスの中で記入して出すとしてみても、すぐに書けるのかなという気になるので、おやりになるのであれば、その辺がもうちょっと拾えるようになると思います。

(三浦指導室長)

先ほどの訂正をさせていただきます。学年と全校の情報共有のことですが、11月には全校共有の予定をされておりますが、6月については把握がしっかりできておりません。学年まではやってありますが、全校にということは、6月については、申し訳ありませんが、私も把握できておりません。6月は部活に届いているかということは分からないということです。

(梶田委員長)

あとよろしいですか。

他にご意見もないようですので、日程1についてはこれで終わりたいと思いますが、先ほども2年前の事件のことを取り上げて言いましたが、2年の間に2人の子どもが自殺という自分の死を選ばなければならなかった。この2年間に2人と、他の都市で、市町村全部含めて、前例を聞いたことがありますか、皆さん。異常事態だとは思いませんか。他にも前例がないことが名古屋市で起こってしまった。いじめのことに言えば、全国最悪の都市だと言われても仕方がないし、私は今の名古屋市の学校教育はその状態にあるというふうに思っております。今やっていること、いっぱい対策はしたかと思いますが、決してそれが有効な効果を上げていないという認識の下で、再度このいじめ問題に対して真剣に、いじめを見つけるのではなくていじめをなくすという観点で、子どもたちを守るために必死になって取り組んでいただきたいなど。我々委員全員、時間の限り協力してまいりますので、ぜひとも、必ずいじめのない名古屋市にしていこうという強い決意をもって、まだ

まだ事実関係の調査というものを進めて、そして事実関係をもとに対策が立てられるべきと思いますが、教育委員会を挙げて取り組んでいただきたいというふうに思います。

それでは、これより日程第2へ移ります。非公開といたしますので、傍聴人及び記者の方は退席してください。

日程第2は非公開にて行われたため、名古屋市教育委員会会議規則第12条の規定により、会議録は別途作成。

午後3時31分終了